

あるじでえ

No. 86

世田谷区教育委員会 民家園係
〒157-0067 世田谷区喜多見 5-27-14

◎ 次大夫堀公園民家園
☎ 03 (3417) 8492

◎ 岡本公園民家園
☎ 03 (3709) 6959

平成11年9月25日 発行
平成12年6月 増刷

世田谷の婚姻

現在、結婚式はほとんどが結婚式場でおこなわれますが、昭和30年代ころまでは各家庭でおこなっていました。今回はそんな時代の結婚についてご紹介します。なお、以下のはなしは主に大正12年（喜多見）、昭和5年（奥沢）、昭和11年（宇奈根）に結婚した3人の女性の話をまとめたものです。

当時、女性の結婚適齢期は22歳から25歳、男性は25歳から30歳ころでした。恋愛結婚のように本人たちで結婚を決めることはほとんどなく、親戚や近所の人たちの紹介で決まりました。仲人はその縁談を紹介してくれた人がそのままなったり、また別の人に頼んだりしました。婿側と嫁側とそれぞれに1組ずつの仲人がつきます。お見合いを仲人の家や料亭などですることもありますが、中には相手に会うこともなく、顔も知らないまま結婚することもありました。

婿側と嫁側とそれぞれ

に1組ずつの仲人がつきます。お見合いを仲人の家や料亭などですることもありますが、中には相手に会うこともなく、顔も知らないまま結婚することもありました。

結納も両家の仲人と親戚が嫁の家に行っておこない、本人たちが出席することはありません。

結婚は11月から3月の冬場に行われることがほとんどでした。これは農家の忙しい

時期を避けたためです。かつては嫁が亡くなったためにその妹と、または夫が亡くなったためにその弟と再婚することもしばしば見られましたが、その場合も結婚式は改めておこないました。またアシイレと言って結婚式を挙げる前に花嫁が婿方の家で一定期間暮らすこともありました。

結婚式の当日はまず嫁の家で別れの宴を催します。お昼から夕方にかけての時間に嫁の親戚や近所

の人を招いて食事をしたり、お酒を飲んだりしました。これをタチブルマイと呼びます。タチブルマイは当日ではなく、前もってしてしまうこともあり、家によってはタ



昭和5年（奥沢）

チブルマイをしないこともありましたが、ごちそうは赤飯に吸い物、さしみや酢の物のほか鯛の尾頭付きやきんとん、かまぼこなどが入った折り詰め(口取り)などでした。

花嫁は当日人々が集まる前にカミイサン(髪結いさん。今で言う美容師)に手伝ってもらって身支度をします。髪は文金高島田に結び上げ、角隠しをします。花嫁衣装は黒地や茄子紺地などで江戸褌と呼ばれる衿先から裾にかけて模様の入った着物でした。袖は留め袖が普通でしたが、昭和2、30年代には振り袖も着るようになります。この着物は後述する里帰りが終わるまでの3日間着ました。また結婚後も結婚式に出席するなど改まった席には着用しました。打ち掛けは結婚式場で式をあげるようになってからは着ましたが、当時は着ませんでした。以前は白無垢の着物を着るのが一般的だったということですが、当時は着る人はいなかったということです。帯は丸帯をオハサミと呼ばれる、前から後ろ帯が少し見える結び方をします。足元は駒下駄を履きました。花婿は紋付きの羽織と袴で

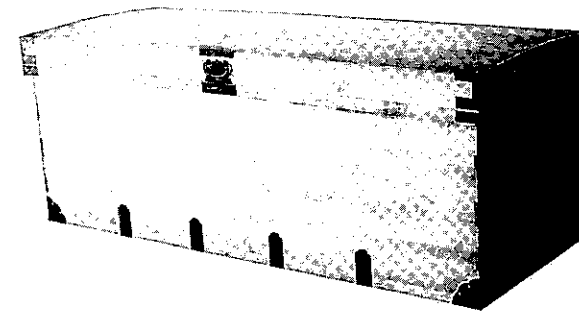
した。

花婿は当日、ムコイリをします。ムコイリとは昼間に婿が仲人とともに嫁の家に来てごちそうをふるまわれ、嫁側の親戚に連れられて嫁の近所をあいさつをして回ることです。半紙を1帖(20枚)ずつ抱き合わせにしてのしをつけ、水引をかけたものを配りました。花婿はタチブルマイにも列席し、途中で帰って行きます。大正12年に結婚した女性はムコイリは嫁入り後の里帰りの際にしたそうです。ムコイリはかつては里帰りの時におこなっていたのがしだいに結婚式当日にするようになっていったようです。

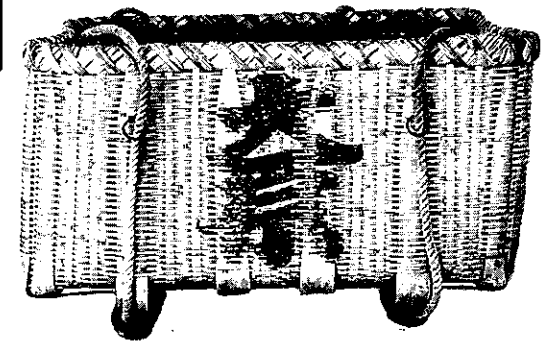
花婿が帰ってしばらくしてから花嫁も家を出ます。嫁入り道具を担ぐお供と、親戚の人と一緒に家を出ました。嫁の両親はこの時は一緒に行きませんでした。時代が下るにつれて父親が行くようになり、そして両親ともに行くようになっていきます。婿の家に着くころには真っ暗になっているので家紋の入ったちょうちんを持って歩きました。

嫁入り道具は両家の距離によっては前もって運んでおくこともあります。長持、箆筒、下駄箱、鏡台、針箱などを持って行きました。長持の中には1ないし2組の布団を、箆筒の中には着物をつめます。針箱などの細々としたものは御膳籠に入れて

天秤で担ぎました。嫁入り道具は運び出す前も、運び込んだ後にも飾っておいて近所の人に見せたものでした。また花婿の兄弟にも草履や下駄などのお土産を持っていくこともありましたが。



長持



御膳籠

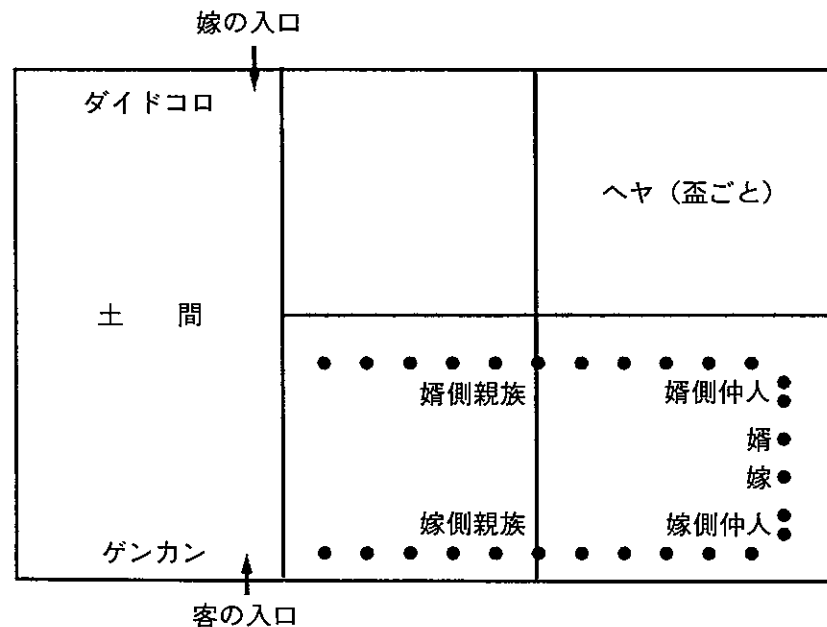


図1 婚礼の配置模式図

門を入ると雄蝶雌蝶と呼ばれる6~8歳位の小さな男の子と女の子が藁をたばねた松明を持っているのでその間を通して花嫁は中へ入りました。これは明治の末ころまでしかおこなわれていなかったようです。花嫁はダイドコロ(裏出入口)から他の客はゲンカン(表出入口)から家の中に入ります。

まず、花婿花嫁はへやと呼ばれる奥の部屋へ入り盃ごとをします。はじめに、雄蝶雌蝶の酌で花婿花嫁が三々九度をし、その後花嫁と婿方の親とが親子の盃を交わします。

盃ごとが終わると表のザンキと呼ばれる部屋へ出て宴になります。列席者は嫁について来た嫁方の親族のほか、婿方の親族や近所の人などです。もともとは1日目は親族、2日目は近所の人、というように2日

以上に渡っていましたが、しだいに簡略化して1日で済ませてしまうようになっていきます。

宴席では床の間を背にして花婿花嫁が座り、その両脇にそれぞれの仲人、続いて両親族が向かい合うように座ります。宴は接待またはオトリモチと呼ばれる人が末席に座って進行を受け持ちました。

料理ははじめに桜湯が出て、次に口取り、刺し身、ハマグリ汁などの乗ったお膳が出ます。そしてお酒の入った盃を「礼酒」として仲人からまわしていきます。料理はタチブルマイの時の料理とほぼ同じですが、それよりも量も多く、豪華なものでした。魚汁、松茸汁、結びサヨリ汁、みそ汁など色々な汁椀が出ますが、はじめは「おちつき」といってお餅の入った汁でした。

汁ものが出る度に花嫁はお色直しをしま

した。普通1～3回程度お色直しをしたということです。お色直しの際には角隠しははずします。その家々によって着る着物は異なりますが、はじめに着る花嫁衣装のあとは黒や色無地のシッカエン（裾の裏地が表と同じ着物）やはり無地の裏と表の地が異なる変わり裏、小紋柄などでした。

宴が終わる時にはお酒の入った盃を接待・媒酌・主人それぞれの「納めの盃」としてまわします。最後にオヤワンと呼ばれる大きな椀にご飯を山盛りにして（お高盛りという）花婿・花嫁が2人でこれを食べました。宴会が終わり嫁がお茶を出すとお開きになりました。この時花嫁が着た着物はほぼ普段着でお茶出し着物と呼ばれました。客は料理の入った折り詰めと鰹節かつおぶしをもらって家々へ帰って行きました。

翌日花嫁は顔見せと言って本家の主婦など親戚の女性に連れられて鎮守ちんじゅや近所を回りました。ムコイリの時同様半紙を抱き合わせにしてのしと水引をつけたものを配り

ます。この時のあいさつの文句は「○○（婿ではなく、舅しゅうとの名）の留守居にもりました誰々です」でした。お嫁さんというより留守番と考えられていたのでしょう。

3日目にはミツメのポタ餅といってポタ餅を作って婿側の親戚に配ったあと、そのポタ餅を持って里帰りをしました。嫁のほか婿方の仲人や親戚などが共に行き、婿は行きません。ごちそうを食べて仲人や親戚は一足先に帰りました。嫁も嫁方の仲人や兄弟に送られてその日の内に帰りました。

この里帰りの時はまだ花嫁衣装で文金高島田のままですが、1週間ほどして髪をとき、実家へ髪を洗いにいきます。この髪洗いの時は一人で実家へ戻りました。アンコ（髪をふくらませるために入れる詰め物）をたくさん入れて重くて痛い髪形から解放され、ようやくほっとできるときだと言います。

区文化財資料調査員 森田聖子



図2 お高盛りを食べる